

2) 当科における家族性乳癌の検討

魚住 尚史・牧野 春彦
 佐野 宗明・佐々木 壽英
 田中 乙雄・梨本 篤
 土屋 嘉昭・薮崎 裕 (県立がんセンター)
 瀧井 康公 (外科)

【目的】 遺伝性に乳癌を高率に発生する家族がある。近年その原因遺伝子が明らかとなった。当科での家族性乳癌を検討した。【対象】 1991年から1998年までに当科を受診した家族性乳癌26人(近親者に2人以上乳癌患者のいるもの)を非家族性乳癌患者1106人を対照として背景因子を検討した。ただし近親者に一人も乳癌患者のいない者を非家族性乳癌とした。【結果】 家族性乳癌の発症平均年齢は47.3歳、若年発症は30.9%であり、発症年齢が有意に若かった。家族性乳癌では、両側乳癌の発生率は11%と高かった。両側乳癌の初発年齢、両側乳癌発生までの期間に差はなかった。ER, PgR 陽性率が低い傾向があったが有意差は認められなかった。核異型度は、Grade IIであることが多いが、高率にGrade V, IVであった。家族性乳癌家系から任意に選んだ14家系についてBRCA 遺伝子について検索したところ、50%、7家系にgerm line mutationを認めた。【結語】 乳癌ハイリスクグループを明らかにすることは、早期発見治療につながると考えられた。

3) Mucocele-like tumor の一例

本間 慶一・太田 玉紀 (県立がんセンター)
 根本 啓一 (病理)
 佐野 宗明・牧野 春彦 (同 外科)

【症例】 46才、女性。1994年8月から乳腺症で当院外科にてfollow中。ドックで右乳腺腫瘍を指摘され、1999年3月当院外科受診。右C領域に径2cm大の腫瘍を認め、ABCではClass V、粘液癌が推定されるも、USやMMGでは悪性所見なく、wide excisionとなった。組織学的には、粘液貯留嚢胞の破裂による粘液成分と上皮成分の間質への逸脱による病変で、Rosenが提唱したMucocele-like tumor (MLT)と判断したが、本例にはADHも伴っていた。【考案】 当初、MLTは良性病変と言われたが、ADHやDCISを伴う報告もあって、現在ではMLTと粘液癌とを一連の粘液産生性腫瘍と位置づける考えがある。今回、MLTと純型粘液癌20例の細胞像・組織像を比較したが、両者が混在した症例もあって、典型例を除き鑑別は困難であった。従って細胞診でMLTが推定される場合、良

性とは即断せず、probe lumpectomy等を行い、診断を確定する必要があると思われた。

4) 乳腺の血管肉腫の1例

植木 匡・小林 康雄
 杉本不二雄・斉藤 六温 (刈羽郡総合病院)
 関矢 忠愛 (外科)

【症例】 19才、女性。1997年の9月より左乳房に有痛性腫瘍を触知し1998年1月19日に当科初診した。来院時、左乳房A領域に表面平滑で円形の腫瘍を触知した。【検査所見】 血液検査では異常を認めず。超音波検査で1.32cm×0.68cmの内部低エコーの腫瘍を認めた。マンモグラフィーでは陰影を認めなかった。【経過】 1998年1月21日に局所麻酔で腫瘍切除術を施行した。切除時所見は乳腺嚢胞で周囲組織に褐色の部分があった。約5mmの同変色部位を病理検査に提出し乳腺血管肉腫の診断を得た。特殊染色で第8因子とCD31がいずれも陽性だった。以上より、1998年2月25日に乳房扇状切除の追加手術を施行し腋窩リンパ節の郭清は行わなかった。追加の切除標本では肉腫の遺残は認めなかった。局所切除後1年半経つが再発は認めていない。【まとめ】 乳腺血管肉腫は本邦での報告は26例と希な疾患であり、今回若干の文献的考察を加え報告する。

5) 乳房温存手術における乳房整容法

三浦 宏二 (がん検診クリニック三浦外科)
 川合 千尋 (消化器科・外科 川合クリニック)

乳房温存療法の大きな目的は美容であるが、広範囲に切除すると著明な変形をきたしてその目的が果たせないことも多い。我々はquadrantectomyを乳房温存手術の基本としているが、外側乳癌に対しては、切除後に胸背動静脈をstalkとする有茎広背筋弁を欠損部に充填して乳房の変形を予防してきたが、効果的な手技と考えられるので手技と成績を報告する。

まず患者を背臥位とし、腋窩から乳房下溝線にいたる皮膚切開を加えquadrantectomyとlevel-2までのリンパ節節郭清を行う。次に胸背動静脈をstalkとする有茎広背筋弁を採取し、これを欠損部に充填して整容を行う。

これまで同手術を施行した25症例の平均手術時間は78

分, donor site に seroma を3例に認めた他は重篤な合併症はない. 1例を除き術後照射はしていないが局所再発例は最長8年の観察期間で経験していない. 長期観察でも乳房の変形は認めず左右対称性がよく保たれていた.

同手術は安全かつ簡便であり, 乳房温存手術における局所コントロールと美容の両立に貢献するものと思われる.

6) 乳癌肝転移に対する生体の日周リズム (Circadian rhythm) に基づいた多剤併用肝動注療法 (FLMP 療法) の試み

長岡 弘・横森 忠紘
 家里 裕・鴨下 憲和
 餐場 正明・矢端 義弘 (小千谷総合病院)
 高他 大輔 (外科)

これまでに我々は生体の日周リズムを考慮し, 投与方法を工夫した多剤併用化学療法 (FLMP 療法) を考案し, 消化管腫瘍に対する優れた有効性を報告してきた. 今回, 乳癌肝転移3症例に対し FLMP 肝動注療法を行い, 有効と考えられたので報告する.

症例1は41歳女性. 左乳癌 (T2a, N1b, M0) 術後7年6ヵ月で多発性肝転移を認め, FLMP 肝動注療法を5クール施行した. 2クール後には CR となり, CR 期間は497日間継続したが, 癌性胸膜炎および肝転移が再燃し死亡 (再発後生存期間641日) した.

症例2は57歳女性で, 右乳癌 (T2a, N1b, M1 (肝, 骨)) の術後より FLMP 肝動注療法を8クール施行した. 2クール後に PR となり, PR 期間は496日間継続したが, 肝および骨転移が増悪し, 現在, MPA + 5'-DFUR にて外来治療中

症例3は41歳女性で右乳癌 (T2a, N0, M0) 術後1年で肝 S4 に転移を認め, FLMP 肝動注療法を5クール施行した. 2クール後には CR となり, 現在も継続中であるが, 動注施行7ヵ月後に骨転移を認め現在放射線治療中である.

FLMP 肝動注療法施行中, 副作用は軽微で, grade 3以上は極めて少なかった.

生体の日周リズム (Circadian rhythm) を考慮した本法は副作用が少なく, 有効性が期待できる治療法と考えられた.

7) UFT の血管新生阻害作用についての基礎検討

馬崎 雄二・米倉和比古
 近久 ルミ・橋本 章弘
 青柳空美夫・宮寺 和孝 (大鵬薬品工業(株))
 山田 雄次 (第一がん研究所)

固形腫瘍の増殖や転移の過程においては, 腫瘍内新生血管の誘導が重要な役割を担っている. 今回, UFT の血管新生抑制機序を解明する為, 種々の検討を行った. RENCA 株を用いた DAS 法において, UFT およびその構成成分 Tegafur, 代謝物 5-FU, GHB, GBL にも血管新生抑制作用が認められた. 各代謝物の抑制作用は持続投与で増強され, 5-FU と GHB の併用効果も認められた. 各種腫瘍株を用いた DAS 法の結果, 20 mg/kg の UFT 投与により 6/7 株で血管新生は明らかに抑制され, その効力は 5-FU および 5'-DFUR より有効であった. 次に, 血管内皮細胞に対する作用を検討した結果, 5-FU は VEGF 依存性の細胞増殖, 細胞遊走, さらに管腔形成を抑制し, GHB にも VEGF 依存性の細胞遊走および管腔形成に対する阻害効果が認められた. また, rhVEGF を用いた DAS 法においても, UFT およびその代謝物には明らかな血管新生抑制作用が認められた. 以上の結果から, UFT の血管新生抑制効果は, VEGF 依存性の血管内皮細胞の増殖, 遊走, 管腔形成に対する 5-FU と GHB の作用が関与していると示唆された.

8) 乳癌骨転移に対する Bisphosphonate 療法

林 光弘・高橋 修一
 畠山 悟・野村 達也
 大森 克利 (厚生連魚沼病院)
 佐藤 信昭・畠山 勝義 (新潟大学 第一外科)

【症例】53歳女性

【主訴】胸背部痛

【臨床経過】平成元年10月25日, 他院にて右乳癌と診断され非定型的乳房切除術 (Br+Mn+Ax) を受けた. 病理診断は充実腺管癌, n0, ER+, PgR+, であった.

平成3年まで UFT 300 mg/day TAM 30 mg/day の術後補助療法を受け, その後しばらく無症状で経過していたが, 平成8年12月より胸背部痛が出現. 疼痛が増強してきたため平成10年1月21日, 当院整形外科受診. 胸椎 MRI 検査にて腫瘍による骨破壊と考えられる圧迫骨折を認めたため, 2月5日当科紹介となった. 入院後 X-p, シンチグラフィ, CT, MRI を施行し胸椎,